

豊富な研修で自己研鑽を後押し

アトミクス 代表取締役社長 神保敏和氏

アトミクスは昨年、経営理念を刷新、人材育成への考え方も盛り込み、人材確保に注力する。また、社内外のネットワーク構築や自己研鑽を視野に入れた育成体制で、着実に成長への歩みを進めていく。

◇

——昨年1年を振り返ると、塗料メーカーにとっては原料の調達難など厳しい状況が続きました。

「当社でも多くの塗料メーカーと同じように、原料の高騰に揺れた1年だったと感じています。原料メーカーの値上げ要請を受け、当社でも価格対応はしたものの、それを上回る原料値上げがあり追いついていない状況でした。それに加え、一部の原料が思うように入っていないこともあり、技術部門では代替品を用意するなどの手間も増え、本来の業務が圧迫されました。第1四半期、第2四半期と売上高は上がりましたが、厳しい状況が続いています。その中、一番歯がゆかったのが、発売した新製品が評判も良かったものの原料不足で増産ができず、ニーズに対応できなかったことです。メーカーとしてお客様が求めていることに対応できなかったことが悔やまれます」

——厳しい状況が続きますね。その中で注力されたことはありますか。

「今までコロナ禍で情報発信がうまくできていなかったこともあり、昨年は展示会に多く出展させていただきました。対面でのコミュニケーションということで、製品の効果を体感しても

らうことに重きを置きました。来場者の数自体はコロナの感染拡大前より減っている展示会もありましたが、来場者は情報を食欲に求めている、具体的な課題を持って来場してくる傾向が顕著に出ていました。出展を通じて、来場者とどんな話ができたか、具体的に案件につながったかどうかなど、効果を検証する良い機会にもなりました。幸い、案件につながったものも多くなっているようです。はっきりとした要望があると、我々としても提案しやすいこともあります」

——昨年は創業85周年を迎えました。これを機に新たに取組んだことはありますか。

「節目の年ということもあり、経営理念を刷新しました。①社会課題解決②ナンバーワン・オンリーワンになることを目指す③社員の幸福追求と自己実現の支援の3つを掲げました。これは、社員に基本的な考え方や取るべき行動をはっきりと自覚してもらうことを目的にしたものです。すぐに効果が出るものではありませんが、長期的な視点で会社づくりを見たときに、全員が共有すべきことを明文化しました」

——明文化することで社員に浸透させるということですね。

「そうですね。長期的な企業の発展のためには、働く人の意識が重要と考えています。経営理念のもとで、社員満足の充実によって意欲及び能力を向上してもらうことが不可欠です。また経営理念で掲げた自己実現は、人生におけ



る目標実現のために人は努力するという、最も根本的な欲求です。これらを会社の成長発展を通じて支援していくというものです」

——人材育成のための研修プログラムにはどのようなものがありますか。

「当社では、入社して数年の若手社員に対して、さまざまな部署の社員と討論や交流ができるような研修を行っています。違う部署とのネットワークづくりは、問題解決の枠が広げられるものと考えており、実際に違う部署の方に相談して問題解決が図れたという例もあります。また、役職者に対しては外部機関なども使い、他流試合ではないですが、同じ役職の人との研修を通じて交流できるものを選んでいきます。社内から社外へ、より視野を広く持ってもらい、さまざまなネットワークづくりができることを念頭に置いて進めています。その他、等級別の基礎研修では、Webで好きな時にさまざまなテーマの研修が受けられ、自己研鑽のツールとして活用してもらっています」

——安心して働ける制度づくりも必要になってきています。

「昨年11月末に65歳定年を決めた

ところ。年金の支給開始年齢が引き上げられており、長期的に安心して働ける環境づくりが必要です。特に熱心に働いていただける方が知見を活かしてくれることは会社にとってもプラスになります。また、新卒者の初任給も見直し、ベースアップを行いました。少しでも会社としてできることはないかと考えた結果です。今後人口が減少する中で、人材採用につなげたいですね」

——人材確保のためには求職者への情報発信も重要です。

「塗料は自動車などの完成品とは違い、半製品であるためどういう伝え方ができるか難しいところです。ただ、塗料以外でも当社には、視覚障がい者用誘導シートや地図管理システムなど、社会課題に着目し開発したものが多数あります。また、ドローンを使い、人が屋根に上らずに劣化状況を調査・点検できる『アトムサーベイシステム』も代表的なサービス製品です。実際にそういった製品から当社に興味を持っていただいた学生の方もいました。安全や安心のための製品を端緒に、当社がどんな会社かを知ってもらえると考えています」

——今後、最重要に掲げる課題は。

「会社全体の生産性をより高くしていくことです。そのため、限られた時間と限られた人数で最大限のパフォーマンスができるような取り組みを模索しています。これは常に意識しながら継続して取り組んでいる課題です。昨年は、今までコロナ禍で停滞していたものが再び動き始めた年でした。今年は経済活動が更に活発になることを期待しています。コロナの動向は注視する必要がありますが、当社でも今年は今まで停止していたことも積極的に行っていきたいと思っています」

——ありがとうございました。